



# エコパートナーシップうじたわら

うじたわらの木くん

～茶文化の源 水・緑・生命の環を育む和みのまら～

発行日：2022年3月1日（第89号）

編集・発行：エコパートナーシップうじたわら広報部会

事務局 TEL（88）6639 FAX（88）3231

## 自然に対する人間の責任

岩瀬剛二（エコパートナーシップうじたわら運営委員、元帝京科学大学教授）

前回、自然の価値として「生態系サービス」の考え方を紹介しましたが、今回は引き続き、「自然に対する人間の責任」について紹介いたします。

人間が存在し活動することで、自然は大きく変貌してきました。例えば、わが国では原生的な森林の樹木は切り倒され、代わりにスギ、ヒノキが大量に植林され、また、田畑をつくって農作物が栽培されてきました。果樹園がつくられたり、宇治田原町のように大面積の茶園が造成された地域もあります。さらに、人間は住むための住居をつくり、移動を容易にするための道路や鉄道を建設してきました。原生的な森林は経済的な価値が小さいとみなされていたからです。しかし、その結果、いわゆる「自然」が減少し、多くの場合、前回紹介しました「生態系サービス」が低下してしまいました。これらの人間の行為を対象地域に生息する生物に対する影響を中心にして考えると、次に示すように大きく4種類の責任として捉えることができます。

### 1) 人間が持ち込んだ種の脅威を取り除く責任

これは、主として「外来種」問題として知られているものです。外来種とは、本来分布していなかった土地に人間が持ち込んだ種の中で、外来種の中には、侵入した土地で個体数を増やし、分布を拡大し、在来の生態系を大きく変えてしまう「侵略的外来種」も存在します。有名なものとしては、琵琶湖などで大量に増えたオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルが在来のフナなどの個体数を減少させたこと、ハブの天敵となることを期待して沖縄や奄美大島に導入されたマングースが、固有種であるアマミノクロウサギやヤンバルクイナを捕食して個体数を減少させたこと、アカミガメ、アライグマなどのペットとして輸入されたものが、日本各地で野生化していることなどがあげられます。

### 2) 人間が減らした種を回復させる責任

人間が生息地を奪い、生活環境を消失させたことで絶滅の危機に瀕している種はたくさんあり、それらは「絶滅危惧種」と呼ばれています。中にはニホンオオカミや日本のトキの個体群などのように絶滅してしまった種もありますが、宇治田原町でも、田んぼや池の中に棲んでいる昆虫で、タガメ、ゲンゴロウ、タイコウチ、ミズカマキリのような比較的大型のは、ほとんど見られなくなっています。植物では、宇治田原町でも広く見られたササユリやセンブリ(写真参照)が減少し、絶滅の危機に瀕しています。



### 3) 人間がつくったものを壊す責任

川の途中に設けられたダムやより小型の堰などがあります。これらのものは、川の上流と下流を分断して魚の遡上を困難にし、生態系を大きく変えてしまいました。さらに、ダムは川の流れによる土砂が堆積するため、機能維持のためには土砂を繰り返し取り除く必要があり、結果として河口や沿岸への砂の供給量も減少してしまいます。従って、発電などの利水機能、洪水の制御などの治水機能により得られる利益よりも維持にかかる経費が上回る場合は、撤去の方がよくなります。これまでに、撤去された例としては、熊本県八代市にあった「荒瀬ダム」があります(youtube動画参照：<https://www.youtube.com/watch?v=dFBCSGsJg1E>)。

### 4) 生態系の構成要素としての人間の責任

例えば、里山の荒廃があります。里山の雑木林や半自然草原に代表される二次的自然は、放置すれば暗い森へと移り変わり、やがて失われてしまいます。人間が住み始めて以降の期間に多くの動植物は人間による攪乱に適応して進化してきました。しかし、近年の人間による自然への干渉の減少が生態系を大きく変えてきており、例えば、トノサマガエルなどは水田に結びついた生活史をもっていますが、近年の稲作の早生化によって、水抜きの時期が早まり、オタマジャクシから生体への変態が追い付かなくなり、個体数の減少が起こっています。マツタケ(写真参照：宇治田原町のマツタケ)生産量や他のきのこ類の発生量の減少も地球温暖化の影響だけではなく、人間が里山に入らなくなってきたことも原因の一つと考えられます。



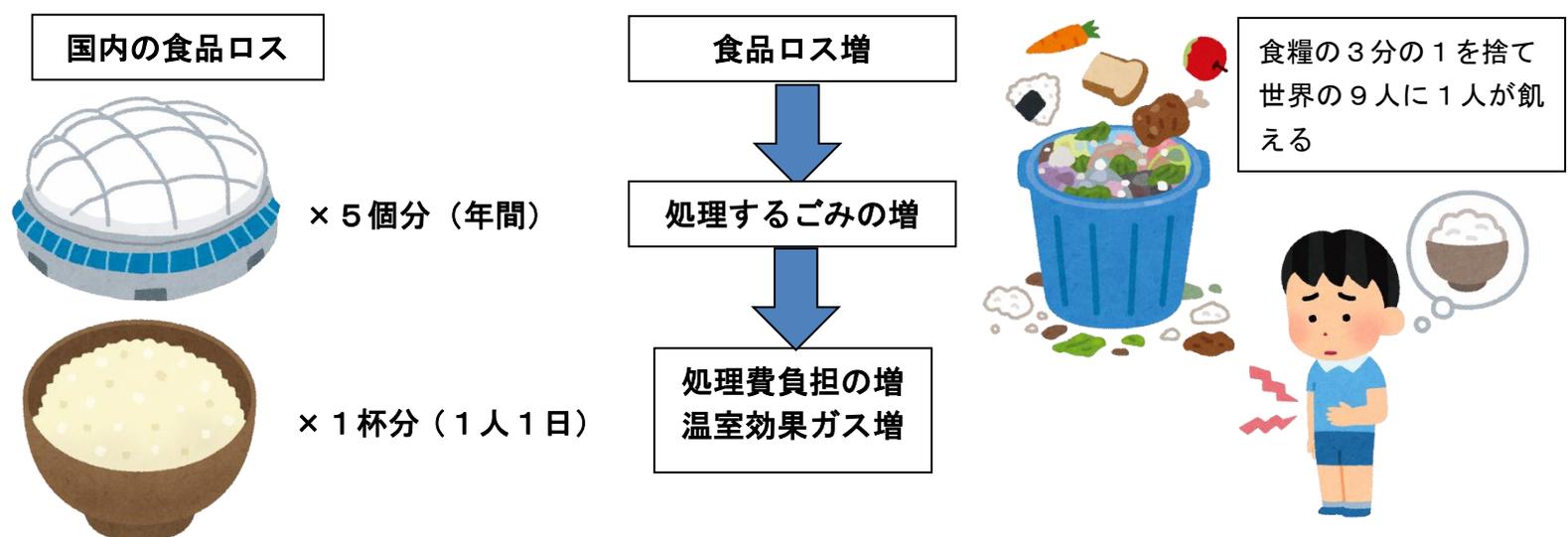
以上、1)～3)は人間の生態系に対する過大な干渉、4)は逆に生態系に対する干渉の低下によって引き起こされたもので、生態系と人間の活動のバランスをとることは、地球の未来を考えると大きな課題であり、いわゆる「SDGs」の重要な例と言えるでしょう。

# “もったいない” むだなく食べよう 「食品ロス」の工夫

阪本 伊三雄（エコパートナーシップうじたわら副会長）

ここ2～3年の事情も含めてですが、新型コロナウイルスによる感染が世界に蔓延してきました。そのためか、少しでも外出を控えてのことか、食生活における食品購入のストック量が増えてきました。ところが、その食品の「賞味期限」や「消費期限」が切れてしまっていると、捨ててしまっている現象が起きています。困ったことですね。エコパートナーシップでは、その「食品ロス」について、考察してまいりましょう。

- ① 「食品ロス」とは、まだ十分に食されるにもかかわらず、様々な理由により捨てられる食品のことです。
- ② 近年、深刻な社会問題として認識されるようになってきました。しかし、その実情は依然として厳しいものです。
- ③ FAO(国連食糧農業機関)の2011年度の報告によりますと、世界で1年間に約13億t、生産した食糧の実に3分の1が廃棄されているとあります。近年は、さらにこの2倍もの量が捨てられているようです。
- ④ 2021年7月に公表されたWWF(世界保護基金)の報告では、世界の農場で栽培された農作物の約40%(12億t)が廃棄されているとの発表があり、それを合わせ、実際は「世界全体で25億tもの食品ロスが生じている」とのことです。もったいないですね。
- ⑤ 片方では、ユネスコなどの報告で世界の飢餓人口は、なんと8億1,100万人と推定されています。これだけの「食品ロス」が発生しているにもかかわらず、世界人口の約10%が十分な食糧が得られていないのです。
- ⑥ では、日本国内に目を注いでみますと、環境省の推計では、2018年度の「食品ロス」は約600万tとあり、これは約1,400万人の1年分の「食」をまかなえる規模です。
- ⑦ その600万tの内訳は、事業系が324万t、家庭系が276万tもあるようです。普段、食品ロスといえば、コンビニやスーパーと考えがちですが、家庭における廃棄が実に半分近くあるのです。モッタイナイです。
- ⑧ 「食品ロス」は、温室効果ガスにつながってきます。捨てられた食品を焼却処分しますと、CO<sub>2</sub>が排出され、埋め立ててもメタンガスが発生し、CO<sub>2</sub>の約25倍の温室効果(地球温暖化)となります。これは、全排出量の8～10%にもおよび、恐ろしいことに自動車の排ガス量と同じ値です。そして、その「食品ロス」の増加は、私たちの「税負担」となって跳ね返ってくることになります。
- ⑨ 「食品ロス」により、地球温暖化が進み、地球全体に影響を与えます。途上国では子供たちを中心に大きな飢餓問題へと結びつくのです。
- ⑩ さて、では「食品ロス」をどうして減らしていくのか、「負」の拡大を防げるのか、今後もエコパートナーシップでは考察し「エコクッキング」などの講座をさらに進め、住民の皆さんと取り組んでまいりたいと存じます。ご家庭でも、無駄のなきよう創意工夫をこらし、楽しい食卓を囲んでいただければ幸せですね。



お問い合わせ先：エコパートナーシップうじたわら事務局（宇治田原町役場 建設環境課内）  
〒610-0289 京都府綴喜郡宇治田原町大字立川小字坂口 18-1

TEL 0774-88-6639 FAX 0774-88-3231 Eメール：[junkan@town.ujitawara.lg.jp](mailto:junkan@town.ujitawara.lg.jp)

会報のバックナンバーをご覧ください

宇治田原町役場ホームページ「トップ」⇒「環境衛生」⇒「エコパートナーシップうじたわら」

茶文化の源 水・緑・生命の環を育む和みのまち 宇治田原

